季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

No.118　2024（令和６）年３月

P2　「国語」と「日本語」と　林 謙太郎
P3　新入生にお勧めの本　古田 拓也／関 俊史
P4～5　日本橋文学散歩　／　作家のおやつ巡り⑧
P6　くずし字学習支援ツールの紹介　前編
P7　本学所蔵資料紹介　／　書評キャンパス
P8　本学教職員著書紹介

「国語」と「日本語」と

文学部国文学科　教授　林 謙太郎

本学に着任以来、一貫して「日本語教員養成コース」関連科目を担当してきました。日本語を母語としない人に、日本語・日本文化を教える教員を養成するコースです。

実を言うと、私は初めからこうした仕事を目ざしたわけではありませんでした。学生時代の専攻は「国語学」、つまり、日本語母語話者による、日本語母語話者のための「日本語学」です。当時の関心事は、専ら古代日本語にあって現代日本語など全く眼中にありませんでした。なぜなら、一応自在に使いこなせている「ことば」に対して、研究する意味を見出せなかったからです。それが縁あって、上級日本語クラスの授業を担当する機会を頂いたのです。初めての経験で、それはもう不安でいっぱいでした。そうこうしているうちに、学習者から次のような質問を受けたのです。「しかし、けれども、でも、だが、ところが、……の違いは何ですか。」「の、もの、こと、の違いは何ですか。」と。即座に満足させるだけの答えは出せません。その場は、私自身の宿題にして切り抜けるしかありませんでした。早速、これらについて分析している辞典、研究書はないか探します。さらに数多くの用例を基に分析するために、近代文学作品などの索引に当たったりするわけです。当時はインターネットなど未発達でしたから、すべて書籍にすがるしかありませんでした。「わかっているつもりでいたが、何もわかっちゃいなかったのだ。」

これが今に至る原点になったのは確かです。類義語・類義表現は、その違いを明らかにしない限りは説明したことにならないということを身に染みて感じた経験でした。

周知の如く、今やインターネットの普及により、調査方法も激変しました。検索してヒットすれば、何でも答えてくれます。かつての「索引本」も近時は膨大なデータベースに取って代わられ、「コーパス言語学」なる分野も誕生しています。

閑話休題。次に日頃感じていることを二、三書かせていただきます。

一つ目は、初級日本語教科書の表記についてです。スリーエーネットワーク 2013『みんなの日本語初級Ⅱ第 2 版』第 48 課を参考に述べましょう。

Ａ：カ**チョ**ウ（課長）、**い**ま（今）お**いそが**（忙）しいです**か**。
Ｂ：い**いえ**、**ど**う**ぞ**。
Ａ：**ちょ**っと　お**ねがいがあ**るんですが（願）……。
Ｂ：**な**ん（何）です**か**。
Ａ：あ**のう**、**ラ**イゲツ（来月）　な**のかから**（7 日）と**おかほど**（10 日）　や**すみ**（休）を　と**ら**（取）せていただけません**か**。

読みづらかったことと思います。太字は高いアクセント、それ以外は低いアクセント乃至、自然下降のイントネーションを示したつもりです。教科書には理解を助けるためのイラストやＣＤが付いていますが、本文には全く音声面の表記はなされていません。それで、それについて問題提起をしてみました。

二つ目は、漢語と外来語についてです。ともすると忘れがちなのですが、これらは外国語ではなく、「日本語」です。日本人が使っている「漢語」を同じ漢字文化圏の中国人、韓国人の目にはどう映っているのでしょうか。全く違った意味で捉えられている点に着目した番組が、ＮＨＫ・Ｅテレの「漢字ふむふむ」です。ですから、漢語にはその語に相当する中国語が参照されるべきですし、その意味が中国由来のものであれば、いつの時代の意味であるかがわかるような辞典等が望まれます。同じようなことは、外来語についても言えると思います。

新型コロナが 5 類に引き下げられ、外国人旅行者がどっと押し寄せている昨今、外から見た「日本語・日本文化」という視点の重要性は、どんなに強調してもし過ぎることはないと思うのです。

新入生にお勧めの本

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師　古田 拓也

①『近代の政治思想―その現実的・理論的諸前提』（岩波新書）
著者：福田歓一　発行：岩波書店　1970年　836円

②『正統と異端―ヨーロッパ精神の底流』（中公新書）
著者：堀米庸三　発行：中央公論新社　1964年　726円

③『三四郎』（新潮文庫）
著者：夏目漱石　発行：新潮社　2011年　374円

不思議と読み始めた場所――あの店のあの席で――まで覚えている本があるものです。①と②は、そんな本です。①は、大学１年生のとき、「政治思想基礎」という授業の参考文献リストに載っていた本でした。背伸びをして読みました。そうして私は政治思想史の教員になりました。②は図書館から借りて、友人をジョナサンで待ちながらページを開きました。信仰とは制度なのか熱意なのか。それがテーマでした。途中でメモが欲しくなり、紙ナプキンに色々と書き付けていると、「ノートやろうか？」とその友人に言われました。来たことに気づかなかったのです。

逆にあまりに持ち歩いたせいで、どこで読んだのか分からなくなった本もあります。何度か読み返した本はたくさんありますが、何度読み返したかすら分からない本は③だけです。上京してきた大学１年生の小川三四郎くんが、知らぬうちに新しい人間関係に溶け込み、そこで生まれたいくつかの夢が、あるいは新聞の文字列に、あるいは絵画の中に消えていく。そんなお話です。

文学部中国文学科　専任講師　関 俊史

①『茶の本』（岩波文庫）
著者：岡倉覚三（岡倉天心）　発行：岩波書店　1929年　550円

②『水墨画入門』（岩波新書）
著者：島尾新　発行：岩波書店　2019 年　1,012 円

③『今日の芸術―時代を創造する者は誰か』（光文社文庫）
著者：岡本太郎　発行：光文社　1954 年　748 円

※①は青空文庫でも読めます。　③の書誌情報は初版本ですが、価格は 2022 年に発売された新装版のものになります。

①と③はわたしが大学１年生の時に読んで感銘を受けた本です。①の原著は英語ですが、本書はその邦訳です。本書は茶道を欧米に紹介することを目的として、道教や禅、華道などと関係させて論じたものです。明治時代の本ですが、グローバルな今日だからこそ読み直したい一冊です。

禅にも深く関わり、わたしが専門とする書にも深く関わるのが水墨画です。②は水墨画とはなにか、ということをあらゆる角度から論じた本です。何百色とある白と黒のコントラストを通して何を表現しているのかを論じたものになります。書に関しての記述も多くあります。

そして、①で掲げた岡倉天心の時代に、書は美術かどうか、という論争がありました。今日でも時折、書は美術なのか、という議論が起こります。③は美術とは、芸術とは一体なんなのかということを述べた本です。何度も版を重ね、2022 年にも新装版が出版されました。岡本太郎は太陽の塔などで知られる芸術家です。本書で岡本は、「芸術はここちよくあってはならない」と述べています。大学１年生のわたしは、この言葉に非常に感銘を受け、「美しい」とはなにかということや、「ここちよくない」表現を求めて、ひたすら筆を握って作品制作を行っていました。

価格はすべて税込（断りのない限り2024年2月現在）

日本橋文学散歩

今号では、江戸開府以来五街道の起点となり、商業の中心として栄えた日本橋周辺にある文学史跡を散策します。

日本橋室町四丁目辺り、かつて江戸市民に時を知らせる鐘撞堂があった「時の鐘通り」には、「夜半亭　与謝蕪村居住地跡」の解説版①が立っています。江戸に出てきた与謝蕪村（1716～1784）は、俳人・早野巴人（夜半亭宋阿）に入門し、内弟子としてここに居住しながら俳諧の修行に励み、後に夜半亭2世を名乗りました。

①

佃煮で有名な日本橋鮒佐の前には、「松尾芭蕉の句碑」②が立っています。1672年に29歳で伊賀上野から江戸へ出た松尾芭蕉（1644～1694）は、この地に8年間居住しました。刻まれている句「発句也　松尾桃青　宿の春」は、36歳の歳旦句で、前年に俳諧宗匠として「桃青」という号を用いて初めて迎えた新春の心意気を詠んだ句です。

②

日本橋界隈には、夏目漱石（1867～1916）に関連する碑が3つあります。ひとつは日本橋三越本店の屋上にある「漱石の越後屋」の碑③です。漱石の作品には、三越の前身である越後屋呉服店がたびたび登場し、大きな宣伝効果があったと言われています。もうひとつは三越を出て日本橋を渡った右手にあるコレド日本橋とその向かいのコレド日本橋アネックス広場の間の路地にある「漱石名作の舞台」の碑④です。この路地は、幕末から明治にかけて「木原店（きわらだな）」と呼ばれたかつての繁華街で、『三四郎』や『こころ』に出てくる寄席「木原亭」もここにありました。 三つ目は少し離れた清州橋近くにある「真砂座跡　漱石『猫』上演の地」の碑⑤です。ここは漱石の作品で初めて舞台化された「吾輩ハ猫デアル」が上演された真砂座があった場所です。

③

④

⑤

⑥

日本橋高島屋の向かいにある1869年創業の「丸善」⑥は、明治期から文化人が集まる「サロン」でもありました。大仏次郎（1897～1973）は、「丸善の私」という文章の中で「丸善に行った時だけ、ふと会って、やあと呼びかけ合う古い古い顔がある」と回想しています。また、漱石の『こころ』や芥川龍之介の『歯車』にも登場する「丸善の二階」とは、日本橋店二階にあった洋書売場のことです。

丸善から茅場町方面に歩くと「坂本小学校」⑦があります。こちらは、谷崎潤一郎（1886～1965）や詩人・立原道造（1914～1939）の母校です。

⑦

⑧

茅場町駅の前には、蕉門十哲と称された芭蕉門下十人のひとりである「其角住居跡」の碑⑧が

あります。芭蕉没後、宝井其角（1661～1707）は洒落・機知を主とする洒落風と呼ばれる作風を生み出しました。

人形町駅から数分のところに、「谷崎潤一郎生誕の地」のプレート⑨が掲げられています。日本橋の裕福な家庭の次男として生まれた谷崎は、前出の坂本小学校に入学してからも、ばあやに付き添われて登校していたそうです。

浜町公園の近くには江戸中期の歌人で国学者の賀茂真淵（1697～1769）が居住していた「賀茂真淵県居（あがたい）の跡」の解説板⑩があります。現在の静岡県浜松市出身の賀茂真淵は、京で荷田春満（かだのあずまま）に師事した後1737年に江戸に下り、隠居後に県居の翁と称して『万葉考』『歌意考』などを著しました。

日本橋には、明治・大正期のレトロ建築が残っている一方で、近年の再開発で誕生した新しい商業施設も多く、グルメやショッピングも楽しめます。新旧が融合する日本橋を散策してみてください。

作家のおやつ巡り⑧

テレビドラマ「寺内貫太郎一家」「阿修羅のごとく」などの脚本家として人気を博し、1980年に第83回直木賞を受賞した小説家、随筆家としても知られる向田邦子（1929～1981）は、食通でも有名です。

そんな向田が、「口に入れると、幼い頃、親戚のおばあさんが、信玄袋から出してくれたおみやげの味がしてくるのである」※1と綴ったのが、人形町にある1917年創業の重盛永信堂の人形焼です。七福神の顔を模した人形焼は、極薄の皮に十勝産小豆で作ったたっぷりのこし餡が詰まっていて、日に3000個、多い時は1万個が売れるといいます。

人形焼の型は七福神ならぬ六福神で、「7人目の神様は買ってくださったお客さま」※2とのことのようです。食べると七福神のような笑顔になりますね。

場所は上記の地図でご確認ください。

※1「人形町に江戸の名残を訪ねて」（『向田邦子全集　第二巻』　文藝春秋　1987年刊）
※2 “東京・人形町の人形焼　100年続く老舗2店の味”. 産経新聞. 2021-07-11
https://www.sankei.com/article/20210711-7HGDQP2QURLXLLCZYC6CFSBGJQ/（2024-01-25参照）

くずし字学習支援ツールの紹介 前編

気軽にはじめよう！スマホアプリと入門書

画像はすべて国立国会図書館デジタルコレクションより

気軽にはじめたい　スマートフォンのアプリが支援！

くずし字学習支援アプリKuLA

監修：飯倉洋一（大阪大学）　提供元：Yuta Hashimoto　**無料**

いつでもどこでも、変体仮名と古典籍によく出てくる主要な漢字を学ぶことができます。

まなぶ　ひらがな１字ごとに字母（元になった漢字）や用例が確認できます。
覚えてきたらテストに挑戦して、学習成果を実感しよう。

よむ　「方丈記」「新版なぞなぞ双六」などを収録しています。実際の文章を読んでみよう。

ひらがなの「す」だけでも字母が４種類!

実際の文書でどのように書かれているか、用例で見てみよう。

ランダムに表示された文字を答えるテストに挑戦しよう。

「新版なぞなぞ双六」は絵もヒントになるので挑戦しやすい!

アプリはスマートフォンで Google Play または App Store からダウンロードできます。

初心者向けの本が見たい　本学図書館で入門書を見つけよう！

- **『手がかりをつかもう！古文書くずし字』**　著者：油井宏子　発行：柏書房　請求記号：210.029-T
- **『古文書をはじめる前の準備講座』**　著者：吉田豊　発行：柏書房　請求記号：210.029-K
- **『もしも、くずし字が読めたなら』**　著者：宮下拓三　発行：右文書院　請求記号：728-MT
- **『「くずし字」読解のポイント：妖怪絵草紙と怪談で楽しく学ぶ！（コツがわかる本）』**
  著者：山本明　発行：メイツユニバーサルコンテンツ　請求記号：728.5-YA
- **『3 ステップで読める仮名のくずし字』**　編者：淡交社編集局　発行：淡交社　請求記号：728.5-T

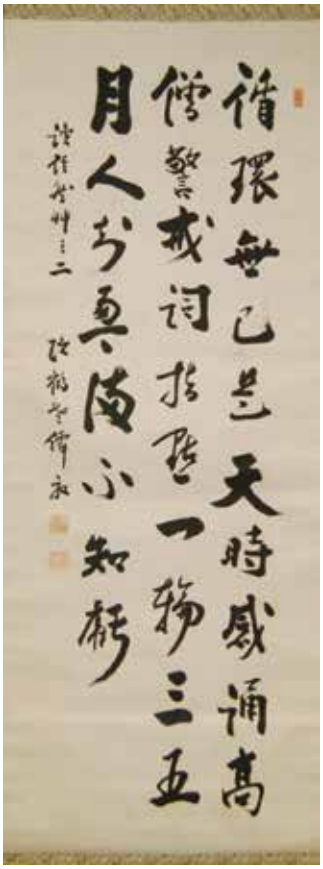
他にもあります！図書館で請求記号 210.02 ～ 210.029 や 728 ～ 728.5 の書架を探してみたり、OPAC で「くずし字」をキーワード検索してみたりしよう。

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅

讀徒然草之二　明治四一年

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



循環無已是天時　循環して已む無きは　是れ天の時
感誦高僧警戒詞　感じて誦ふ　高僧　警戒の詞
指點一輪三五月　指点す　一輪　三五の月
人知盈滿不知虧　人は盈満知りて　虧くるを知らず

天の運行はぐるぐるとめぐって尽きることがない。兼好法師の戒めのことばに感じ入りそらんじて声に出して読む。一つのまるい十五夜の月を指差しながら、人は満ちることは知っていても、満ちればやがて欠けるということには思いを致さないのである。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第四巻より）

週刊読書人　千代田区立千代田図書館
本学附属図書館　共同企画

書評キャンパス

書評キャンパスは、大学生がプロの編集者と二人三脚で書評を執筆する企画です。2023 年度は、次の学生が書評専門紙『週刊読書人』に掲載されました。（2024 年 2 月現在）

『週刊読書人』掲載日	書　名	氏　名
9月8日（第3505号）	相沢沙呼著『教室に並んだ背表紙』（集英社）	佐藤 葵　（文学部中国文学科1年）
9月29日（第3508号）	森見登美彦著『夜は短し歩けよ乙女』（KADOKAWA）	坂井 春香　（文学部国文学科2年）
10月6日（第3509号）	市川沙央著『ハンチバック』（文藝春秋）	河辺 宏太　（文学部国文学科1年）
10月13日（第3510号）	小砂川チト著『家庭用安心坑夫』（講談社）	渡辺 楓　（文学部国文学科2年）
10月20日（第3511号）	吉村昭著『白い航跡　上・下』（講談社）	山形 悠　（文学研究科博士前期課程2年）
11月3日（第3513号）	白尾悠著『サード・キッチン』（河出書房新社）	小笠原 未惟（文学部中国文学科3年）
12月15日（第3519号）	原田マハ著『さいはての彼女』（KADOKAWA）	福留 舞　（文学部国文学科4年）
1月12日（第3522号）	今村夏子著『こちらあみ子』（筑摩書房）	石川 花響　（文学部国文学科1年）

過去の掲載
書評が読めます

2017 年度～ 2021 年度…『書評キャンパス at 読書人』
（本学所蔵　請求記号：019.9-S-2017 ～ 2021）

2021 年度以降…大学生の「読む」を支えるウェブメディア YOMKA「書評キャンパス」
https://yomka.net/campus-top/ ▶

本学教職員著書紹介

『アナキズム美術史 日本の前衛芸術と社会思想』

足立　元著
（平凡社、2023 年 8 月刊行）
四六判　478 ページ　4,400 円＋税
ISBN 978-4-5826-5212-3

本書は、近代日本における美術史を、アナキズムの精神史という観点から切り出し、再構築することを試みたものである。

アナキズムとは、自由・平等・助け合いを目指す社会思想だ。普通、思想と美術は、遠いもののように思われるかもしれない。だが、アナキズムは近代美術のうちの「前衛」と呼ばれる作品群の本質と深く関わっているのではないか。そのような仮説を立て、歴史的な実証を試みた。

本書には地味な挿絵や汚い言葉もたくさん引用される。それは、等身大の若者たちによる表現の闘争を扱ったからだ。一体これが美術史なのかと言われれば、違うのかもしれないし、違ってもいいと思っている。

今から 70 年前に書かれた『今日の芸術』という本で、岡本太郎はこう宣言した。「今日の芸術は、うまくあってはいけない。きれいであってはならない。ここちよくあってはならない。」岡本は、戦後日本の思想的な課題に向き合いながら、創造のあり方を模索した。今日、もはや美術は（それを「美術」と呼ぶことに抵抗があるなら芸術でもアートでもよい）、綺麗な装飾物ではなく、思想的産物に他ならない。

さて、アナキズムというと、危険な悪人が持つ過激思想だと考える人もいるかもしれない。しかし、これは東洋の老荘思想に通じるもので、反戦平和運動として現れたり、富や民族や性の格差を是正するアクションであったり、資本主義の窮屈さから抜け出すための生き方であったりする。その意味でアナキズムは 21 世紀に求められる正義と愛の思想だ。

究極的には、もろもろの虚飾を捨てて根源的な生のあり方へと近づくことがアナキズムではないかと思う。黴臭くなった近代美術史がそのような思想的な力を持って、血の通ったものになることを、本書は目指した。

本書の元となる書は、予期していた通り美術史学の領域では批判と称賛の両方をいただいたが、望外にも同世代の活躍するアーティストたちから多くの共感を得た。今後、自分より下の世代から本書がどのように受け止められるのか楽しみでもあるが、今わたし自身はもっと過激で読みやすい内容の書を準備している。

編集後記

「季報」118 号をお届けします。

今号では退職する先生からの言葉と、本学教員が新入生にぜひ読んでほしい本を紹介しました。

また、本学の学生が執筆した書評に関する情報も掲載しています。ぜひ手を伸ばしてみてください。いつも自分が読んでいる本とちょっと違う世界が広がっているかもしれません。

そしてくずし字に出会うことがあったら…学習支援ツールをお試しください。　（Sh）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 118 号

発行日　2024 年 3 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ